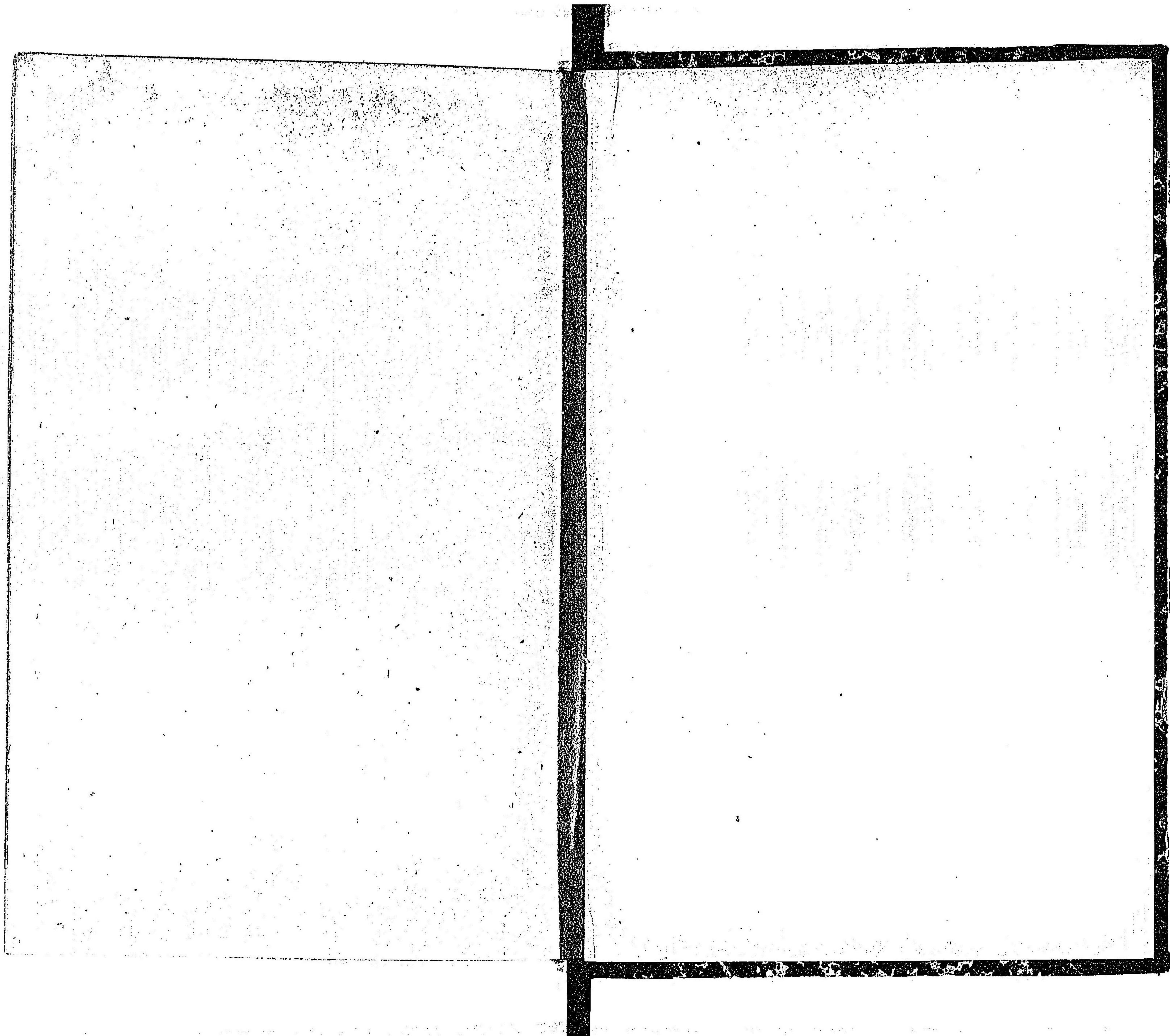


19

547

國
文
源
委
前
編



19-547

例言

一 此書の國文各體の沿革を授くることとその例証として塗版にかく類を省かんがために
て一部の成書としたるにあらざる

二 此書と拙著文體辨の附録と抄録したるもれにて前後二編に分ち前編には古代の各體を示
し後編には現今の文體を示したり其説明を省きたると口授に譲るべけれはあり

三 此書前編の美文と實用文とを問はず巧妙なると拙劣あるとを別たす各時代の文章は各體
を示さんと録録しるもれなればかの換筆と志して講讀すべきもれとい自ら同しからざる

四 此書は文學史の一は讀本中において對照乃便あるものはすべて省きつたし目次に符號
をつけて分たり

明治二十九年十一月二十九日

武藤元信 著るす



國文源委前編

我國の文體は左の三類の大別を

第一類 本來乃國文

本來の國文は時代によりて變化われど言語の順序に従ひて文字を排列せるものなれば我が
 語族を失ふことなし文字乃使ひ方と漢字の音と義ととりれり任賜留國國宰等漸至漸とい
 る詞につきて証せばこの弊留爾麻豆の五文字の音をりして義をからず任賜國宰等至の六文
 字と義をかれども其排列と全く漢文の法に従はざるが如し(立都都氣 又は字事物頭振衝
 按ふと異なる書方もあれを音と義ととかれるは同じ) 假名發明の後もなほこれに基けり近
 頃に至り分界益々著しく義をかる者に漢字を用ひ音をかる者には多く假名を用ふるやう
 になれり橘文字につきて証せば義をうるは「橘」と漢字もとりま音をうるは假名にて「たち
 はな」(多知婆茶)と漢字にて「多知婆茶」(どろくが)が如し活語の語尾と助辭とい多く假名とも
 ちふるものとなれり_とへば「賜布」「賜利」「どろくが」して「賜ふ」「賜り」「どろく」「豆」「爾」「乎」
 「波」「どろくが」して「て」「は」「は」「どろくが」が如し

この本來の國文は造語文脈の上より又二種に細別すること左の如し

第一種 其時代通行の文語にて書きたるもの

第二種 其時代通行の口語にて書きたるもの

この細別の中古の末より新しくあらはれ近古の末に至り全く分れ近世に至りて著しを區別を見るに至れり試に近世は例を以ちて証せん

惣体新法の事と立て行ふ思ひうけず間違わやまちなどあれば最初に其事を申出して始めたる者、越度としてこれを咎むることなれども最初より惡去りれとて始めたることにあらず思ひうけざるあやまちは是非なければ其者をとりひいたにあらず(秘本玉くけ)といふ第一種にて現今に存するものあり(まじりの變化とあれど)

(西籍概論)

此間私が京橋を通りうりりますと十二三の調市かちろくど走てまゐりましたやがて露よ油揚をさくはれまゐた(浮世風呂)

何にいたせ女子であの位な文者は珍らうござります(全)

なといふ第二種にて是れも現今に存するものあり

この外なほ時代の風潮と著述乃種類とにより左の如き體裁あるを見る

(イ) 偶儷の調を帯ふるもの

(ロ) 歌曲の調を帯ふるもの

(ハ) 古代は語脈文脈を交ふるもの

第二類 漢文様の文

漢文様の文は國文をりくに盡く漢字を用ひ其句法まで漢文のやうにりきたるものあれど一種の使ひうたありて純粹は漢文とは同トからず(希又は漢文と同トき處もまどれど)それは純粹の漢文にては我が語脈に違ふこと多きゆゑかくいふたるなり此牀の文は反讀すべき性質を具へたりこれも近世の例を以ちて証せん

各把置之諸侍以下若爲叛逆殺害人之由於有_レ其_レ屈_レ互_レ不可_レ被_レ相_レ把_レ事(武家法度)

この牀上古小於てハ我り語脈に違はざれど中古よりハようく小違へるも出來たり現今も廢れて幾不書讀の一部分に存せり

第三類 翻譯様の文

翻譯様の文は其書き方と第一類の如くなれど外國文(漢文)の語調を帯ひたるものあり(近

世期は洋文翻譯ハ名詞ハ外漢文翻譯ハ語調カ洋文の語調を帯ヒたるは多くと明治に至リテの事ナリ)さて此語脈のわらゝるゝはむねと文の接續と助辭の省きかたとよれりこれモ近世の例を以ちて証せん

文苑英華に載する所六韻又過くるもれなきを觀て見るべし(作詩志發)

是れ中郎が悲憤するもゑん宛として今日にあり(全)

何季稷が其平生の作を焚きしに劣る萬々(全)

これ體近古には文章のこゝかゝりに散見したれど近世に至りてハ全文此體を用ふるもあり殊又語調も一層甚しくなれり現今ハ更々甚々きものまゝ見ゆ

この三類ハ一書れ始より終まで一體にて貫けるもわり混交したるもあれば書を以ちて分ちかたゝ左の目次にのするハ全文をとりて説明せんとして掲けたるもわり又其書中の一二節を以ては一二句をとりて説明せんとして掲けたるもわりそは一節一句といへども前後れ文と對照すべき必要あればあり

目次

第一類

上古

出雲國造神賀詞○

天之眞宗豊祖父天皇御位につまじし時の詔●

古事記●

出雲風土記●

中古

大井川行幸和歌序●

土佐日記○

庚申夜奉和歌小序●

竹取物語○

伊勢物語○

空穗物語○

大和物語○

蜻蛉日記○

源氏物語○

紫式部日記○

枕草紙○

今昔物語○

宇治拾遺物語△

榮華物語○

大鏡○

近古

撰集抄○

無名抄○

海道記●

著聞集○△

徒然草○

吉野拾遺●

公事振元○

文明一統誌△

御伽草紙○

近世

おわん物語○

武藏證○

奥儀抄○

方丈記○

平家物語○

十訓鈔○△

愚問賢注序●

神皇正統記○△

難太平記●

小夜の寢覺△

武藏野の紀行●

謠曲狂言○

東海道名所記○

奥の細道△

大學或問●

國性爺合戦○

讀史餘論○

六論徳義大意□

經濟録□

漢字三音考●

秘本玉くけ□

西遊記△

一話一言□

歌道大意○

八犬傳○

大和俗訓○△□

折燒柴の記□

藩翰譜□

駿臺雜話□

牛馬問●

玉勝問○△□

開田耕筆○△□

北窓瑣談○△□

年々隨筆□

浮世床○

鳩翁道話●

第二類

上古

法隆寺金堂坐樂師像光背銘●

風土記●

中古

雲州消息●

近古

明月記●

貞永式目○

近世

武家法度●

古事記●

東鑑○●

尺素往來●

第三類

近古

保元平治物語○

太平記●

近世

作詩志●

經濟要錄●

合密開宗●

悟窓漫筆●

氣海觀潮●

泰西國法論●

附錄

擬古文

増鏡○●

富士の嶽をみてしるせる詞●

春れやまふみ●

石山詣之記○

鶉衣●

櫛八玉神乃祝詞

コノリガキレトヒハダカマノハラニハカミムスヒノミヤノミコトノトマケルアマノニヒスノスハヤツカタルマデダキナツトシタハソ
是我所燧火者於高天原者神產巢日御祖命之登陀流天之新巢之凝烟之八拳垂摩豆燒舉地下者於
コツイハ子ニダキコラシテタケトハノヒロナハツラセテマカオホクナノナハタスハキサワニヒキヨセアツサキダノトナ
底津石根燒凝而栲繩之千尋繩打延爲釣海人之口大之尾翼鱸佐和佐和邇控依騰而打竹之登遠遠
トナナニアメノナクヒダマツラム
登遠遠邇獻天之眞魚昨也(古事記)

出雲風土記の内

オツトナツクユエハクニヒキマセキツカミツノミコトノリタマハクヤクモタツイヅセシニハサメノリカクニナルカモハツクニヒサクツクラ
所以號意宇者國引坐八束水臣津野命詔八雲立出雲國者狹布之稚國在哉初國小所作
カレツクハムトノリタマヒダクアスマンラキニミサキナクニノアマリヤトミレバクニノアマリヤトミレバクニノアマリヤトミレバクニ
故將作縫詔而栲余志羅紀乃三埒矣國之餘有耶見者國之餘有詔而童女胸鈕所取而大魚
ノキダツキリテハダスハキハフリリテアミツヨリノツナリカケテシモツラハナヘナニカハフツンモソノロモソノロニ
之支太衡別而波多須々支穗振別而三自之綱打掛而霜黑葛間耶爾河舟之毛曾呂爾國
ヨ来引來縫國者自去豆乃打絶而八穂爾支豆支乃御埒也此而堅立加志者石見國與出雲國之塚
ナルナハサヒメヤマコレナリマタヒケルツツナハソノナカハマコレナリ
有名佐比賣山是也亦持引綱者爾之長濱是也略

大井川行幸和哥序

紀 貫 之

あられとが君の御代なが月のこゝぬかと昨日いひてこれる菊ををそそみたまひまたくきぬ
べき秋ををそそ給はんとて月の桂のこかた春の梅津よ里御舟よそひてわたしもりをめして夕
月夜小倉の山乃ほどり行水の大井の川邊より行幸し給へれば入方の空にはたなびける雲もかく

みゆきをまちながる、水底にはよごれる塵なくておほん心にすかなへるとみことこのりしてか
ほせたまふことと秋は水にうらびてはなかる、木葉とあやまたれ秋は山をみればおる人なき
錦とおもほえもみちれ葉のあふりにちりてくもふぬ雨ときこえ菊の花の岸よれこれるを空を
る星とおどろき霜の鶴川邊に立て雲のれる、かとうたがは夕の榛山の峽よなきて人れ涙を
れと一旅の鴈雲路にまごひて玉札とみえあそぶのも水にすみて人よなれたり入江の松いく
世へぬらんどいふあととすよませ給ふせれらみじがき心のこのもりのもにまごひつゝあき言
の葉吹風の空にまごれつゝくさのりの露とともてうれしきなみだれち岩浪とともよよるこば
し死心を立かへるもし此言は葉世のすゑまでのこと今をむりしにくらべて後のけふをさうん
人海人の栲繩くりのへししのぶれ草は老のばさかめや
(扶桑拾葉集)

庚申夜奉倭歌小序

源 順

伊勢の齋の宮秋野の宮よとたり給ひて後冬の嵐さむくなりてののじめとつゝなぬりの夜のの
えさるにあたりなるく、一夜をつくくこやハあかすべきとおもほしてまきのうちにさ
ふふふれもと人御はしれもよまらぬをさうち君ごちに歌よませあそびし給ふうこのだいま
いはく松澤よるれ琴に在るこれにつきてはげばあしびきの山下風はひくくなる松のふかみど

り鳥羽玉の夜半に聞ゆる琴れおもしろさもみなひとつにみづれあひゆきかよひてうへもむか
 一此人かぜまつにいろといふ琴のしづべをつくりたへそめけんをぢんおもやまける順
 うしられらみ夏も冬もどかぬ雪かどあまたれ心のやみはうちにもやまとにもすべてつきな
 く御まへのやり水よりうべるのこりれきくに思ひあそすれいづみばかりよしづ染る身はづ
 かしくなまたかた衣笠岡に散る紅葉バと見るとせばかゝるまごゐにさふふことさつまゆ
 りれどさもあふばあきよのひこそきくそそりわふはめらけまくもかゝこそ御かみあはれ
 ともたぐみさいはい給ひてんとて今のいよへを見るがごとく後の人も見よとてかさじる
 てたてまつるはおほせおとにたがふなぞ

夜を寒みことにしもいる松風ハ

君にひうれて千代ぞふるらん

(扶桑拾葉集)

枕草紙此内

清少納言

碁をやんごとなき人のうつとてひもうちどたないがいろなるけしきにひろひかくよかとりた
 る人のぬすまるもかゝこまごころけしきに碁盤よりは少老遠くて及ひつゝ袖の下いま片手に
 て引きやりつゝうちたるををかし

うつくじまもれ

ふりに書たゝるちどの顔雀の子のねすなきするにおどりくる又紅粉などつけてすゑたれば親
 雀の蟲かご持て来てくゝむるもいとくうたゝ三つばかりある兜の急ぎて遠ひくる道ひいとち
 いさだ塵かごのわりけるをゆめさに見つけていとをかしげなるおよひよとらへておとななご
 に見せゝるいとうつくしわまふそぎたる兜の目に髪のおほひたるを掻きハ遠くでうち傾たて
 物など見るいとうつくしたまきかけよゆひゝる腰れりみ乃白うをかしげなるも見るにうつく
 一おほきにさわらぬ殿上わらふそのさうぞきたてふれてわりくもうつくしをらげある兜れあ
 のらさまは把きてうつくしむ程にかひつきて寝入りたるもかうたし離れ調度蓮のうき葉のい
 とちいさきを池よりとりあげて見る葵のちいさきもいとうつく一何もくちいさき物はいと
 うつくしいみじう肥えたる兜れ二つばかりあるが白ううつく一さが二藍のうすものか衣な
 がくてゝすきあげたるが遠ひ出でくるもいとうつくま八つ九つ十ばかりなるをのこけ辭をさ
 ながにて文よみたるいとうつく一鶏の雛の足だかに白うをうけよ衣みじうなるさましてひ
 よくゝとらしがまゝく鳴きて人乃後に立ちてありくも又親れもとにつれだちありく見るも
 つく一雁の子舍利の壺瞿麥の花

見るにことあることなきものゝ文字にかきてことごとく

覆盆子露草炎胡桃文章博士皇后宮乃權大夫揚梅いたごりはまゝて虎の杖と書きさるるこかつる
なくともありぬべき類つまじ

ふるもれと

めづらしいふべき事にはあふねど文こそ猶めでたきものかれはるかなるせかいもある人の
いミトくおぼつかなくいうあらんとおもふよ文をみれば只今さゝむかひたるやうにおぼゆる
いみじき事なりかし我思ふ事をかたやまつればあしこまでも行つかさめどこゝろゆく心ち
こそすれ文といふ事なからまゝかばいかよはぶせくゝれふたがる心ちせましようづの事思ひ
くゝて其人のもとへとてこまゝとてかきてたきつればおぼつかなさをもあぐさむこゝちする
ままして返事みつれば命をのぶべか決る實にことわりや

ゆきあふれ震はにくれど雪れまゝるよてまじたるをりし雪は楡皮筆いとめでたし少ふたえ
らたになりたるほど又いと多うの降ふぬが瓦のめごとお入りて黒う真白おみえさるいとどか
ましくれあふれの板屋霜も板屋庭

海道記乃内

源 光 行

略上 山中に瑠川あり身は河上にうかんでひとり渡れども影はみなるこお沈て我とふたりゆくか
くて參河國おいたりぬ雑鯉鮒が馬場を過て數里は野原に一両のはしを名けて八橋といふ砂よ
睡る鴉鴛は夏を辭去り水にたてる社若ハ時をむかへて開たり花ハ昔は色はさず咲ぬむ橋
もかなじ橋なれども幾度つくりかへつゝん相如が世を恨しは肥馬に乗て昇僊にかへり幽子身
を捨る窮馬に類て當橋と渡る八橋よ八橋よくもでに物たもふ人ハ昔も過ぎや橋柱よ橋柱よお
のれもくちぬるか空くくちぬるものハ今もまたそぐ

そみわびて過る三河のやつ橋を

心ゆたてもたちりへりや略下

略上 江尻の浦をそぐれば青苔石にたひ黒布磯にそる南は澳の海森々と波を更かゝ孤帆天にこび
北は茂松鬱々と枝たれて一道つるをなす漁夫の網をひく身をたすけんとして身をくるしみ將
魚は釣をれむ命ををしみて命をほろぼす人いくばくの利をか得たる魚いくばくの鯛をかもど
むる世をわする思ひ命をたひふ志彼も是もともにれなじこれのみは山にあせかく樵夫は北風
をになひて夕よりへり野にあしあへく商客ハ白露を拂うてあかつきお出面くは樂みまぢく

なりといへども各々此苦みのみかこれ渡世の一事なり

人ことにしる心とかかれども

世をすぐるみちハひとつ成けり下略

愚問賢注序

藤原良基

やまと歌に道人みまられるよ似てしらず世擧て詠せるわして詠せずもてあそぶものゝげい
 といへどもいまだ桂林の一枝をも攀ずまなふやかられたほしといへどもかつて崑山は片玉を
 も捨せず羚羊角をかけ飛鳥目をすく古賢の趣向趣ふに跡なく風雅は遺言求るに所かゝ爰に頓
 公きでに七旬有余の遐算を保てよく三十一字の奥旨を辨たり久しく柿本のこと葉をいたひて
 ふかく山邊の至道を尋ねしづかに柴は戸の花は陰は優遊して春色の減ずるををしみひとり松
 山は月の下に吟嘯して秋光はたけあなるをうなしむ造次にもうまず顛沛にもわすれず道に
 ふける輩これにくみせずといふことなく學に志を人は是も參せずといふことあり僕多年の知己
 あり一道の先達也清達に宴を開きときハ金石はまじはりとかたをし蒼海よいかぶをうかぶる
 日ハ鷗鷺は盟をわそれ冠をうけ印をときしれちハあかつきの鷄いたづら小老はねふりをあ
 ひたごろろし春の燕なほむろしの事を話すに似たり一日閑暇乃餘數ヶ篇目を注す玄々の道意

を會せむがため條々此批判を仰ものなりこれしうしあがら達人乃用よあふず雜兒は蒙と撃と
 あり
 (扶葉拾葉集)

吉野拾遺乃内

太夫判官赤松光範が津比國のかためありける時左馬頭正儀も度々はかふれけるを口をくくれ
 もひこめて過し侍りたるよ去ぬる住吉のたゝかひに討れてうせし宇野の六郎といひしが子に
 熊王といひけるがまごをさなはたさき光範ふいひけるは正儀は我爲よも親は敵にてさふらへば
 いろよもしてうち侍らんうちへこえて正儀又つらへ侍らんにおさかく候へばなごか心をゆ
 るし申さぬことのかかるべきたどひこゝるをゆるすことのはへふすも七とせ八とせ程も仕
 へ候ハハそ乃うちよは打ぬべきたよりれいかであかふ御いとまをこそ給をらめと涙となが
 せば光範もいとあはれとたもひながらをさなはたれ敵の國へやふむもこゝろもとあゝ又ハ命
 ようはりてうたれしものゝ子なればうたみごもおもふべけれと一ひてとめ給ひなれどもす
 こゝれとあしくかりなばよもちかづけ給はじをさなく候りふん時參りてこそと一きりにのぶ
 みなれば力および給てつねに身をはなち給はざり一刀をたまひて是よて本意とげよとて阿
 部野まで人あまたをへてやふせけるよそよと我にひとしたるハ一人具して赤坂は城に

ゆきてそ乃ほそりにたゝずとてありけるを兵庫介忠元が見つ々ていかなる人よやおそすらん
 とたづねられてわれは大夫尉光範のさふらひよて宇野の六郎といひけるものゝ子と熊王とい
 へるも乃にて候へ父よて侍る六郎ハ去時住吉れたゝかひにうたれて候ふを一門よて侍る備後
 守が我をおひうちて領地と奪ひ候へども光範と心を合せ候へばせんかたあくていりなる寺へ
 もいり侍りて僧法師ももなり父のあを帯ひ候はんがためにさすかへ侍るといひけるをわい
 れとさゝてまづわがかたにともなひてさまぐゝいたとて後に正儀もありつる事をかたりて
 をさなく候へど心れさかゝしくてあそ申すにあはれかり給ひてめしよせ給へりもとより
 あさけある人ありけきば熊王もたもひつきておやれあぐをもわすきになるよやよく宮位にり
 り十五程よりければかうちの國にてすこしある所をえらさんといひければも恥ある一矢と
 もいさふらひてこそとて辭しにけりあくる年の春父が七めぐりにあたりけるに思ひつ々てこ
 よひ正儀を打て父の手向にもし光範乃こゝろをもやすめ奉らんとたもひたちてあまなるよそ
 の日御前にめして々ふは吉日にてゐるされば元服せよしとて和田和泉守もといりとりあ
 げさせて和田小次郎正寛と名のふせ吉野殿より給はせけるよろひをさまひなればなみぶを袖
 にかたてよろこぶ夜にゐるまで正儀は御前に在けるが又ふたれもひ出て打奉らなればこよ

ひこそたれもひてひぎをたし直して正儀よめを掛くれば年比の情深かりしことけふの元服の
 事あどたれもひつゝいてゐるで情なく打奉らんとおもひかへしてこゝろをうづむれば父の敵と
 いひ譜代の主君のあぐといひ一かたなふねばとれもひさぶめけれども何心もなくわらせ給
 ふありさまを見ければ御いたしとてこゝかねけるにや廣縁に出て辭をあげてあたまさけぶを
 人々も正のりもおぼつかなくおもひ給ひて障子をひらき見まへるよふゝづめるさまのた
 いにぞ見えずありければいのよやとてはせ給ひければありつる心れうちをけいしてどにうく
 に君のた先君の爲父乃ためにみづから死なんより外と候はずとて刀をとりあせせありつ
 る人どもみな涙にくきてありあぐらいかでさゝあらんと取つきてはたふかせねば力たよばで
 それ刀にてもとどりたしきり往生院にて形をうへ君より給せせる名なればとて正覺法師と
 いひける寺の傍草の庵をむすびてもも心のかはるおとのありもやせんとして往生院の門の
 外へと出ず去て行ひてあまけり光範より給はせける刀はありしありさまをくはまき書うへて
 うへまけるとかやいとあどきなりける事にこそ

難 太平記の内

今 川 了 俊

細川相模守御不審の時故入道殿隨分奉公忠節人又越給ひかども彼太平記おは只新熊野に入

御とばかり書きたるよや其時の事と既及御大事へよりける間右御所にひそのよ故入道殿申給ひて貞世と清氏に無内外中承者也うををめし上せて清氏に差ちがへさせられハ御大事にも及ぶべのらず人ともあまたう一なるべからずと申請給ひて其時は我等遠州より一を以飛脚めし上せ給ひしかば參川此山中まで上りしに清氏若狭國に落けること重て飛脚下り此上着の時必そりる御用にめさきつるとい語り給ひしが言語道斷の事ありき此事を故殿申請給ひける故に清氏野心の事ハ無實たる間款き中さんごめに越州直世を清氏内々よびけるを依怙畏まかふざりける時貞世在京あらばさりとも可來物をと清氏樂所の信秋に申けると聞て思ひ寄て申出られけるとかやは是は隨分故入道忠と存て予一人に替て此御大事を無爲にと存給ひし事無隠しをぞごや此大平記にりざりらん是も此作者に後に申ざりけるにや其時の落書よ

細川にかいまりをりし海老名こそ

今川出て腰とのいさき

是ハ相模守に海老名備中守にくまきて無出仕也しかば如斯よみけるとかや此興此事なれどもその時此事されバ書れせ侍ばかりあり

武藏野の紀行の内

北條氏康

上比之八月上旬あさ霧ふかくわたり入りて行くに山ありいハ山といふ此山のうろは甲斐の山略北はちぶなぞ申しはべるそれよりむさしけくに勝沼と云ふ處につたぬ齊藤加賀守安元此處の領主也つねぐみちくは事申さるよはしけれバ山海珍物數をつくし饗應一々る此處よ二日逗留してそれよりむさし野をよりゆくおまことに行くともはてはわらばころはぎすはた女郎花れ露にやされるむいのことゑぐははれをもよほまばかりあり

むさし野といづくをさして分いらん

ゆくもかへるもいしてあければ

古の草のゆかりもあつうしければなりこれもむらさだ乃一もどゆ系なるべき

へつなよわか世の中れ人なれば

去るもしらぬも草れひとと

あくれば八月十三日あさ霧いよくふのくして道もさぐりに見えとらず馬よまかせて行くよ長るれ庄よつさぬまあとやどかむらさきれ巻よりるあさ霧をわたりらんとあるもこれなるべし大澤れ庄などを行くおやうくすみだ川よもつさぬ河づらをみればまことにする死馬れハハとあしとあの死馬のむれぬて魚をくふありまむかかをかもひいで

都島をみだがはらふ船ハあれど

たいその人の名のみありハハ下略

十四

大學或問の内

熊澤伯繼

問 富有大業とあるべき事如何

答 仁政を行はんとすの富有あらざれば叶はず近世無告の者多し無告とて誰をこのみ何方へよらん便なく何をして父母妻子とも小一生をおくるべきやうあるもれあり仁君の政にまづ此無告の者をすくひ給へり今此無告の至極の浪人あり度々の飢饉に餓死せるもの數を去らず豊年に至て米下直ふても勝手蕪果ぬれば益かゝ毎年人しづかず餓死するもの多し此本と國主郡主不勝手にて家中を扶持はなし其上に家中の物成少くかれバ又家中に家來をも扶持とせず故也其外眼前多く出来る諸浪人の知る所あり諸大名諸家中身上不相應の借金おてすべきやうなければつよきと思ひかゝるも氏小取る事年々に多し此故又民間乃借物分に過ぎて多しすべて今の世の中と貴賤共に借金のおひ倒れといふもの也武士百姓つまりこれ工商も困窮す是れ天下の困窮也公儀の御藏の金銀米穀残らず出してすくひ給ふとも百分の一も及ぶべからず如何とあれば今借銀萬と天下の有銀の百倍も過くべしと云はれども政を以てよくひ

給はハ亦易かるべし古も此か後世にも有るべうら今又此より甚やすき大道あり

牛馬問乃内

新井祐登

柳生但馬守殿様を貳疋銅給ひ帯々打太刀にして劍術し給ひ去又此様ども至極業に通じて初心の弟子衆はいつも此様に負しと也爰に或る浪人鎗を自慢にて何とぞ柳生公へ出合度と思ひ縁を求めていたり對面の後叔私義少々鎗を心懸候乍憚御覽被下といふ但州聞給ひ安き事ながら先此様と立合見られよとある時件の浪人大に腹あゝき顔色にて是はあまりなる事と申すに尤なれども先立合見られよとある故是非なく竹刀をもちかゝりければ様も竹具足と面をかけ小さくはへを持って互ふ立合ふ彼の只一突と突倒さんと懸りしに様つかくど袖つて何の造作もかく件の男をうちたり案に相違し今一度と望ければ又一疋の様を出さるゝに立合ふ又此様もたゝうれ大に面目を失ひ歸りそれより四五十日ほどは夜を以て日につき精心に工夫をつくり又柳生のもとへ行き叔件の様と立合申度と望みければ但州聞給ひ見申すに其方工夫先日よりも殊外上達也今度の様ども中々勝事成かた去夫と立合ふ候へどて様を出さるゝに互に相向ひいまだ鎗を出さるゝ様大になきて逃しと也件の男も但州の門弟となり奥儀を傳へたりといふこれ様さへも學ぶ所をすれば人中の有無を知る況や人として妙術を備へまらざるや

十五

貞丈雜記乃内

伊勢貞丈

一證文の事を手形とも云ふ事證文ハ必ず印をおす物なり上古印といふ物なかりし時そ手に墨を付てたしてしるしと一けること也されば印の字をたしてとよむ也かしてここの手の形をたしける故也東鑑卷六ハ手印とあるハ手の形をたすと云ふ也今も印おき時の爪に墨を付てたすを爪判といふもかの手形をたしける心也

一世に通用する書狀ハ文言昔乃詞を用ひてハ今世の風ハ合はず無禮の様ハ聞ゆる事ありましと漢土の書簡の詞を交へて書きたるは耳にもたち人によつてはよ先もせず意得かぬる書もあり無禮ハもなる也今時學文ある人ハ如右ある事あり宜しからぬ事也學文の友達などの間にてハそれにてよし世上表ごぢ公儀むされ書札は世上一統の習はハ一隨ふべしといふざる漢土風を用ふべからず人のほめぬ事也又進上物の名も唐風の文字ハ叶はずとも此方おて昔より用來り世上につかひ習はハたる文字を用ふべし鮭を鱒魚と書き鱈を吳魚と書き鯉節を松魚脯と書き鰯を明脯と書きの類わろハ漢土の文字に違ひたりとも此方の人に通トさへすればよ

漢字三音考内

本居宣長

漢國は字甚多くて煩ハしく、ぐくしく返て不便なり爾雅の釋詁ハ林蒸天帝皇王后辟公侯君也また柯憲刑範辟律矩則法也また辜辟戾畢也などあるが如き凡て如此く同トことに字ハ數多あるは各少しづゝ義ハ異なるを以て分けて名けたると精しけれども其中にはさのみ義の異なることなきも數字あるハ無益のこと也又いと精しく分けたると思へば右の内の辟の字の君と法と罪との義ある如く一字を多義に用ふるはまぎらハしく甚不便也又かの右の字を君ハも用ひ君の妻ハも用ふるが如きと殊にまぎらはし凡て如此く一義に多字あり又一字に多義ハもらんよりハ一義一字からんハ宜しからぬ又同書釋畜に馬の品を云へるに膝上皆白惟鼻四散皆白 四蹄皆白首前足皆白膝後足皆白咽前右足白唇後右足白驪などハ馬乃足の毛れ色の少まづハれ差にまで各其字のあると甚くだくしく不便の至なり抑も萬物萬事を悉く如此く細碎ハ分たんとせば幾千萬の字ありとも盡るよとあるべからず故よさバウリ字多けれども終よ萬物萬事を各一字づゝにては盡すことあたはず故て二字三字連接せる名稱も多かるをやさて又字は多た故よ目ハこれと視れば義理よく分るれども字の多きハ比すれば音はいと少くて一音ハ數字數言を兼ねる故に耳に其言を聽きてハ義の分らぬこと怪ねよ多

鳩翁道話内

柴田武修手録

上の榮螺と申す貝は手丈夫お手厚い貝で去かむ丈夫お蓋があるソコでの榮螺は何ぞといふところら蓋をひつしやり去めて丈夫なところぢやと思つてゐまする綱や鱸がうらやまゝがせぬさりとては結構お身のうへぢやといへば榮螺が疑をなで、おまへ方が其様おいうてくれられぬであまり丈夫な事もない去かしながらマアこう去てゐるまばまんざら難義なこともないお屏下自慢をしてゐるときさつふりと音がする榮螺がうぢかゝ急に蓋を去れてトつと考へてゐながら今の何であつたかしらぬ綱であらうり釣針であらうか是ぢやによつて要害が常にしてないところもなぬ綱やすくさと取られたらうらぬさても心もなぬ事であるシタガまづおれは助りつゝと兎角するうち時刻もうつりモウよりうらうとつと蓋とあげあたまをぬつとさし出してそこらを見まはせバ何となう勝手が違ふやうなよくくみれば魚屋町の肴やの店に此さへ十六文と正札付にあつてゐました略

第二類

法隆寺金堂坐樂師像光後銘

池邊大宮治天下天皇大御身勞賜時歲次丙午年召於大王天皇與大子而誓

願賜我大御病大平欲坐故將造寺樂師像作仕奉詔然當時崩賜造不堪者小治田大宮治天下大王大皇及東宮聖王大命受賜而歲次丁卯年仕奉(上宮聖德法王帝說)

古事記此内

於是其國主畏惶奏言自今以後隨天皇命而為御馬甘每年雙船不乾船腹不乾船載共與天地無任奉故是以新羅國者定御馬甘百濟國者定渡屯家爾以其御杖衛立新羅主之門即以墨江大神之荒御魂為國守神而祭鎮選渡也

出雲風土記此内

滑狹鄉郡家南西八里須佐能衰命御子和加須世理比賣命坐之爾時所造天下大神命娶而通坐時彼社之前有磐石其上甚滑也即詔滑磐石故詔故云南佐

高麻山郡家正北一十里二百步高一丈周五里北方有檉椿等類東南西三方並野古老傳云神須佐能衰命御子青幡佐草恥命是山上麻時初故云高麻山即此山降坐其御魂也

雲州消息乃内

藤原明衡

近曾參門下而當御出之間空以罷歸畢其後補侍中以來亂暇不候就中六位藏人出暇文多以籠居仍

鳳閣等致其勤之間不見家園之月偏侍蓬來之雲拾調相隔一變尤深條々請奏為內覽可參博陸殿侍聊有可申合事可今參會給也恐々不具謹言

八月 日

左 少 辨

謹上 宮內卿殿

明月記此內

藤原定家

廿五日又持參哥於殿御前撰定書連之午辰計退下猶三首不甘心之由被仰雖察不出來又一二首計書之付女房經御覽宜之由有仰又中合大臣殿畢書連東燭以後持參院付右中辨進入了隆房卿同參入進之事當晚進入白河僧正權大納言兩三位細家隆信朝臣生蓮光師寂蓮入道左府入道殿已上二人廿日別當消息云新古今竟寔疑風情可豫參由蒙催此事如何竟寔事先例不審答竟寔事不存知延喜古今天曆後撰管見之所及不見竟寔只所見日本紀竟寔計也於其事者被稱日本紀人別名得其人詠哥一首賦只如清書之儀今如承者不似此哥賦極以不審者

東鑑此內

十一日戊戌今日二品逗留船迫宿給於此所重忠獻國衡頭太蒙御感仰之處義盛參進御前申云國衡中義盛箭亡命之間非重忠之功云々重忠頗笑申云義盛口狀可謂髮髮今誅支證何事重忠獲頭持參

之上無所疑賦云々義盛重申云頭事者勿論但國衡甲者定被剝取賦召出彼可被決實否其故者於大高宮前田中義盛與國衡互相逢于弓手義盛之所射箭中于國衡託其箭孔者甲射向之袖二三枚之程定在之賦甲毛者紅也馬黑毛也云々因茲被召出件甲之處先紅威也召寄御前覽之射向袖三枚取寄後方射融之跡揭焉也殆如通鑿于時仰曰對國衡重忠不發矢乎者重忠申不發矢之由其後付是非無御旨是件箭跡異他之間非重忠之箭者義盛矢之條勿論也凡義盛申詞始終符合敢無一失但重忠其性稟清潔以無詐偽為本意者也於今度儀者殊不存奸曲歟彼時即從為先重忠在後國衡兼中箭事一切不知之只大申持來彼頭與重忠之間存討獲之由不乖物儀歟

尺素往來此內

藤原兼良

武家人今競望官位事於八省輔諸察頭諸職大夫及四品等者為高官上位之故尤可申請將軍之御舉達至諸察助諸職亮諸國受領并叙爵已下者為微官淺位之上者敢不可及武家之御一行或又八省卿衛府佐并上階者頗無左右難有勅許歟勅負尉等者被募寺社造營功之段先規頗以違繚者也仍今度除目之次定可有其沙汰歟若又以後日臨時可被宣下歟理運既無相連者昇進何及預儀哉次法師官位事僧正僧都律師者就法品被任之法印法服法橋者依成舉被叙焉云云

武家諸法度此內

一大名小名在江戸交替所相定也毎歲夏四月中可致參勤從者之員數近來甚多且國郡之費且人民之勞也向後以其相應可減少之但上洛之節者任教令公役者可隨分限事

一新規之城郭構營堅禁止之居城之隍壘石壁以下取壞之時違奉行所可受其旨也構塀門等之分者如先規可修補事

一於江戸并何國假令何篇之事雖有之在國之輩者守其所可相待下知事

第三類

源平盛衰記の内

法輪院には警固の大衆守護の武士様々軍の談議評定去ける中より三位入道申けるは合戦の習勢小の依らず謀をむねと申傳へたれ共南都山門へ牒狀を遣して大衆を召さるべきのと宣ふ衆徒の僉議にハ近來の作法を見平家の振舞を察するは佛法の衰微王法の牢籠時至れり依之人臣専ら憂之僧徒大小敷之雖然且く淨海入道の威に恐れて在家出家閉口處二宮御入寺偏に是れ正八幡宮の衛護新羅明神の冥助也我寺の興隆此時に相當れり速小平相國が暴惡を炳誠せん事衆徒乃力によるべし誰れやの人をり憑むべし何れれ時をり期をべし天神も地祇も必ず納受をたれ佛力も神力も速く降伏をくとへ御座さん事疑有るべからず略

太平記の内

略上主上万里小路中納言藤房卿を以て被仰けるハ東夷征討の事正成を被憑思食子細有て勅使を被立處に時刻不移馳參條殿感不淺處也抑天下草創れ事如何なる謀を廻去てか勝つ事を一時に決して太平を四海に可被致を不殘可申と勅定有ければ正成畏つて申けるは東夷近日の大逆只天の譴を招き候上は衰亂乃弊へに乗つて天誅を被致に何の子細か候べき但し天下草創の功ハ武略と智謀との二にて候若し勢を合せて戦はハ六十餘州の兵を集て武藏相模の兩國に對すとも勝つ事を得がたし若し謀を以て争はハ東夷の武力只利を摧き堅を破る内を不出是を欺くハ安うして怖るハに足らざる所也合戦の習よて候へハ一旦の勝負とハ必ずしも不可被御覽正成一入未だ生て有と被聞召候はハ聖運遂よ可被聞と被思食候へと頼しげに申て正成ハ河内へ歸り

兵庫に一日御逗留有て六月一日被回瑤興處ハ楠多門兵衛正成七千餘騎にて參向す其勢殊よ勇々敷く見えたりける主上御簾を高く捲せて正成と近く被召大儀早速れ功偏に汝が忠戦ありと感ト被仰ければ正成畏つて是れ君の聖文神武れ徳に不依ハ微臣争でか尺寸の謀を以て強敵ハ圍を可出候乎と功をを辭して謙下す略

作詩志教此内

山本信有

袁中郎嘗て李王諸人の唐を形似て唐からざるを排撃して曰く唐人の詩と工と工なりざるに論なり弟取りて之を讀む其色鮮妍として旦晚あつたに筆を脱する者の如し今人此詩は工なりと雖も人の釘籠を拾ひ筆硯を離るる色バ己小陳言死言となる唐人は千歳にして新なり今人は手を脱す色バ陳腐かりふれ他の訣か一只性靈より進ると割襲より出ると從て來る所の異なるゆゑ此み下

梧窓漫筆此内

大田元貞

天下の治亂は着儉の二字にあり先祖の儉素に去て興り子孫は汰着にして滅ぶ漢唐宋明は勿論なり劉宋蕭齊偏安の國と雖も皆然り漢書貢禹の上疏を見て治亂は體千歳一轍なるを知らるべし

經濟要錄此内

佐藤信淵

經濟とい國土を經律一蒼生を濟救するに謂かり所謂國土を經律するとい先づ其國の國都より東西の領分界に至るまで其度數を測量するを經と云ひ其國の南界より北界に至る迄の度數を測量するを緯と云ふ凡る此經緯を審に去氣候を察し土性を辨し地力を盡すは食物衣類の大

本なり又蒼生と濟救するとい先づ境内の百姓をして水旱の患なく居處は安寧あるを樂ましむるを濟と云ひ各自に産業を勉勵せ去めて食物衣類の餘裕ありむるを救と云ふ能く境内は平原曠野小谷河海地澤林藪を經緯して氣候の寒暖を審にし土性の剛柔を察し氣候に適ひ土性に宜し其所の諸品を作り天地化育の勢力を盡して土地に遺利なうらしめ士農工商共に其職を勤て懈怠すると無く奢侈すると無れば財用充足去て國家富盛ると必せり即ち是經濟の要旨にして國家の主たる者此一日も怠るべからざるの急務なり若し夫れ此道を忽よすると此と其國必ず空虚し衣食足りざるに至る衣食己に闕乏するに至ると此は人民五常を守ると能はずして或は法の畏るべきをも顧ずして惡事を爲し或は飢寒に斃れ或は離散し田園荒蕪し郷里無人の境と成るに至る豈畏れざる可けんや故に國君の要務は經濟の道を脩め邦内を富豊にするより要なるは無く小氏の要務は其業を勵みて衣食を充足するより要なるは無し小氏孝心ありと雖も衣食の給せざるに及でと其父母を飢寒せしめざるに能はず國君仁心ありと雖も財用の給らざるに至ると其百姓を剝奪せざるを得ず經濟乃一日も怠るべからざるを以て察すべき也

舍密開宗此内

宇田川榕庵

瓦斯と蒸氣とは大に異なり但其温素を盡むに至りては少く同きのみ蒸氣は湯の吹氣の如し
温素を盡むると緊切ならず故に冷物に觸れ冷氣に遇ると其温素を喪ひ凝りて露と爲る瓦斯
は然らず温素を持つこと甚だ緊切にして童に冷氣に因りて流動せざるのみならず氣壓を以
て尙氣形を失はず蓋し瓦斯の温素ハ潜温素にして蒸氣の温素は顯温素なり下略

氣海觀瀾廣義此内

川本幸民

諸體同類相聚する性ありこれを凝聚力と名く是れ諸體の分子相聚りて各其全形を存す此原
を云ふ者にして總引力より起る所なり若し此力止むときは諸質疎解し物盡く粉碎す譬へば
一握の濕る土砂ありこれを捏するときは是れ許多の分子を聚めて一團と爲る者に去て即
ち千萬の質質水乃爲め粘着して一塊となる者なり而して又乾燥すると其の再分れて粉碎
す是れ其凝聚力を失へばなり然れども此碎粉亦尙これより微細なる分子の凝結して成る者
にしてこれを分ては又分つべし今こゝを以て此力ありて而して體成ることを知る

泰西國法論此内

津田真道

古人奴は人にして人に非ずと謂へり故に奴も毫釐も人權を與へず只視て畜生に同トく其主
人所有の一物とせり故に奴を御する道馬牛を畜ふるに等しく之を殺し之を傷け之を逐ひ之
を賣り之を典ずる惟其主人の意に任せたり故に奴の有する所乃物得る所の物の即其主人の
有する所得る所は物ありけり

附錄

擬古文

增鏡此内

かの島には春さてもなや浦風さえて浪あらく渚の氷もとけがたき世のたゞにいとわばし
むすばるゝ事つきせせりするに心ばそは御すまひに年さへだよりぬるよとあさましくおぼ
さるさふらふ人々もまばらあわれいみづくんとにたりよと一の正慶二年といふ閏二月あ
り後れささふぎのさじ決たかふよりとりわだて密教の秘法とこゝろみさせたまへば夜をおろ
このごもふぬ日數へてさすがいたうこうト給ひにけり心ならずまどろませたまへる曉がた夢
うつゝともかぬほどは後宇多院にありしがらの御面影さやかにみえ給ひて聞えしとせ給
ふことたほかりけりうち驚死て夢なりけりとおぼせ程いはむかたなく名残のな御涙をせき
あへずさ先さふまゝをとればすもろひあし源氏の大將すまの浦にて父御門見たてまつりけり

夢の心ちし給ふもいとほはれよたのを去すいよく御心づまはさるりてのしほぢが御むの
 へのやうなる釣舟もたよりいできなむやとまたる心ちし給ふに大塔は宮とりもあま入のた
 よりにつけてきこえ給ふ事たえず都も猶よの中トづまりかねたるさまにきこゆればよろづ
 におぼしなぐさめて關守のうちぬるひまをのみうかいひ給ふよゝるべき時のいされるおや
 御垣守にさふらふつは物ども御けしきをほの心えてなびきほかうまつらんと思ひ心づまに
 ければさるべきかぎりかゝらひおはせてたなじ月の廿四日け明ぼれいみじくはばかりてり
 ころへめてたてまつるいとあやうげなるあまれ降りふねのさまにみせて夜ふかき空の晴さま
 ぎきにれいひだす折しも霧いみじうふりて行さまもみえずいかさまならんとあやぶけれご御
 こゝろをしづめて念じ給ふよたもふらたの風さへふますいみてろの日の申の時又出雲の國に
 つかせ給ひぬこゝにて入々心ちしづ先けるおなト廿五日伯耆國稻津浦といふところへうつら
 せ給へりこの國は那波は又太郎ながとしといひてあやしき氏なれといとまうに富めるが類ひ
 るく心とさかくしくむねくき死物ありけれがもこへ宣言をつのりまたるにいとかゝトけな
 しと思ひてとりあへず五百餘騎の勢にて御むかへにまわれり又の日加茂の社といふ所にたち
 いらせ給ふ宮より御社おぼいいでられていとたのもしろれより舟上寺といふ所へおはしまさ

せておはれへは宮にながらふこれより國々のつは物どもに御敵をほるほすへまよしの宣言
 つうはしける比叡の山へものぶされけりかくておまにはいのでせ給にしひるつかたよりさこ
 ぎあひて隠岐の前の守おひてまゐるよ一聞ゆればいとむくつけくおぼされつれごゝにも其心
 していみトくうたがひけれバ引返しおけり京にもあづまよもおぼるさまはぐさ思ひやるべ
 一正成が城のかこみにそこられ武士どもかしこよつごひをるよかゝる事さへそひにたればい
 よく東よりのものぼりつごふめり三月もありの十日あまりの程よゝかに世の中いみトうの
 へじる何ぞと死けバ播磨國より赤松なよが一入道圓心とかやいふもの先帝は勅にたがひて
 せめくるなりとて都の中おめてまごふさいの六波羅へ行幸なる両院も御幸とて上下たちさは
 ぐ馬車走りちがひ武士どもれうちここのトとたるとおろろいとおろろいとおろろい六波羅の軍つよ
 くて其夜はかのもれども引返しぬとて少ししづまれるやうなきさかやうよひひつちぬれば猶
 心ゆるびなたよそのまゝ院を御門もかいしませば春宮もいまれ給へるよろしうふぬ事とて
 廿六日六波羅へ行啓なる内のおとゞ御車にまゐり給ふ傳は又我右のおといよいますとせおや
 かたの儀式ばかりにてよろづ此内大臣殿御うゝるみつかまほり給へばいまだきびはなる御や
 どをうゝるめたりとておれぬよもやがてさふらひ給ふ御修法のためは法親王だちもさふらは

せ給へりこゝもいしこもいづさとのみまごえて日敷ぬるは院よりのおほせとて上達部殿上
 入までもほどく隨がひてつとものを召せば弓ひく道もおがくしき若侍などをとへぞ
 たてまつりけるげにひぢもなりぬべき世の中せうやうにいひしるふ程にやよひもくれぬ卯月
 の十日あまり又あづまよりものふおほくのなる中にひとし笠置へもむかひたりし治部大
 輔源高氏のがれり院よたのもまくだこめきてかの伯耆の舟上へむらふべきよし院宣たま
 はせけりあづまをたち一時もうしるめたくふたごゝるあるまづたとおろかならず誓言ふみ
 をらだてけれどもそこれ心やいかいあらむどかく聞ゆるすぢもあけりけりこの高氏はいにまへ
 の頼義朝臣の名残ありければもとのねざいはやんどなだ武士かれを承入よりこのかたかし
 らさしいだす源氏もあくてうづもれすがしながふ頼ひろく勢四方にみちて國々に心よせの物
 おほかればかやすに國の傷やふたをりをえて思ひこの道もやあむあどしたまさめくも
 るく伯耆國へむらふべといひなしてまづ西山大原をふりよ一とまりまて五月七日ほのく
 とあくるほどとり大宮の木戸をぬきひらきて二條より七條に大路をひがまさまに七手
 おわられて旗をさしつけて六波羅をさして雲霞のごとくたなびき入るにさらにおもてをむ
 かふもれな一此治部大輔のやうより先帝の勅をたまはりけきばさのさまに都をほろがさむ

とするなりけり聞つくるどのやいふこゑは雷のあちりゝるやうに地の底もひいた梵天は宮の
 中もさゝおごろだ給らんと思ふばかりとをみわひたるさま來一のゆくさきくれて物おほゆ
 る人もあま御門春宮院のうへ宮だちなごましてひととさがしまもたはしまさず糸竹のうらべ
 をのみさこしめいならひたる御心にもめづららうとままければさああされ給へり武士ご
 も中半をわけて金剛山へむかひさばさならぬのこり都にあるかぎりはたかひをなす今を
 かぎりは軍なれば手をつくいてのゝトる程まねびやらむらたあし雨のわしよりもまげくのま
 りちがふ矢又わたりてめの中へに死をうくる物がずをささず一日一夜いりもみどよみわかす
 ふ両六波羅に残るてなくふさぎつれどついに陣の内やぶられていまだかくとみえたま日比さ
 ふらひこもり給へる上達部殿上人などもけふこたもひますけたらむぐに君のたごまさんか
 ぎりいのでかまりでもちかむまてかねてよりかくがまへけるとも一ろめさで昨日かと
 よ當代の宣旨をさまひりもれかくうらがへりぬれば誰うかまひとらむすべて上下となく
 ひどつにたちこみてあまてまごひたりひくらし八幡山崎竹田宇治勢多深草法性寺などもあ
 がる煙ども四方に空みちくして日のひうりも見えず墨をすりこるやうよてくきぬこふも火
 がりりていとあさましければいみじう固めたりつるうまの陣を争うじてやぶとてそれま

免れていさせ給ふ御心ちども夢路をたぐるやすなり内のすへもはとあやしき御すがたよ
とさらやつゝなてまつるいとまがく志兩院御手をとりうのすといふばりにて入ふすけ
られつゝ出させ給ふ上達部大臣だちはかまのそはとて冠などのれちゆくもいらす空をあゆ
む心ちしてあるハ河原を西へ東へさまぐちりぐちりになり給ふ兩六波羅中時特益ひむがしをさ
てあづまへと心掛けておちれば御幸もかなじさまになる西園寺の大納言公宗は北山へおハ
しにけり右衛門督經顯左兵衛督隆隆資明宰相などは御幸の御供にまゐる按察の大納言資名ハ
あしをそこあひて東山わふりにどまりぬなごいひいはうありけむ内大臣殿は御子の別當
道冬ともなひ給ひて八日のあけのいまぐくらきほどに我御家の三條坊門萬里小路にれば
しまつたるにあゆみ入り給ほども心もなくて北れた門へはまき出でゝひらかに
へりおはきたるとれもふうれまさいそぎて見ればおとりの御なほしに指貫ひきわけ給へき
ばくるく見え給ふ別當と道程のよりなきに折馬帽子に布直衣といふ物うちさてほそやかに
わの死人の御せんとにもまぎれたればとみにも見えす火なごもわざとなければくさきやごの
あやめわかれぬにはやすいかにもあり給へるにやと心ちまごひて御方といかおくとこゑも
わなまて聞えけるいとことりにいみじうあはれありさては御幸と近江國におはします程

にいふまといふほどりにてなにかの言とかや法師にてはましけるが先帝乃御心をせよてか
やうのかんもほの心え侍りけるにやまちうけて矢をはなち給ふ又京をりも退手りるあさま
こえけば六波羅の北といひし仲時内春宮兩院具たてまはり番馬といふ所は山のうちに入
りたてまつりけり手のものども猶残りてしたがひつたけれどもたかひもかなはずやあり
けんついふ此山にて腹さりにけりおなじだみなみ時益といひしは是までもまゐらず守山のへ
んにてすせにけりどまきこえーわやなくいみだぶとのさまなり御所々の御供に之俊賢の大
納言經顯の中納言頼定は中納言資名大納言資明は宰相隆隆資をぞ残りさふらひける俊賢資名
頼定あごはやがてそこにてもといりきりてけり一院よりも歸りいらせ給ふ御門に御ふみをた
てまつり給ひてめむくお御出家あるべーあごまで申されけれども思もよらぬよーをかたく
申されけるとかやと聞えし下略

富士の嶺を觀てあるせる詞

加茂 眞淵

これれ眞淵さまお不自れねをささけておもへらくとはつ神わが大君の御國のありさまはた
かくのごとしと今年村田の春さとしが此嶽よむらひていへらくいはまぐもかまこた大御前の白
きみそつてまつりて高御座よれいらますらむはかくあゝあるべたといへり此言をほひうづあ

ひわひよろこびてさくらにふへごとをせりもくふきけ富士の高ねはや又方の天つ日を冠
とたわか星をかづらにたらし白雪を衣と一青雲を裳と一二つの國をくふと一死百の峯を臣と
ひさむ八十國原の草木を大御氏と一わこの千嶋をまつろへる諸國とミさ々天地のわきのはじ
めよりよりゆひのきはみうごかすつきすきさす日いつる國にちて日の入る國まで聞えつぎ
日は縦日の横かげともろとものかたちひとくくしてまがれる所なくほのかくるくまなくひ
ふなだぎになだりもする廣にひろくいませる大神になもゆるしかれこそすめふみことれやま
かけ死いつまつりごを本としてさくをしへをてしまはずいれれば氏草も心にかぐろきか
くれをれかすあどほうふうへをいさす天となぐくつちとたひかかふしりませるありさまをみ
ふはしれもひたふらすことはあれの神高ねれとれもふきもありける

鶉衣の内

横井也有

蝶は花にとびかひたるやさき物に限るなるべしろれも鳴く音乃愛なれば籠にくるしむ身
あふぬこと猶めでよけれさてころ莊周が夢もふの物に托しなめ唯とんぼうのみころかれに
はや、並ぶらめど糸よほすがれ鶉よさくれて童のもてあろびとあるだにくるしきを阿房の鼻
毛につながらんといはどくちをさきこととぞかな美人の眉に譬へる峨といふ蟲もあるもの

を

芋虫は腹だつものになごへ毛虫いむつかう死親仁の號とす背む一きむ一は名のみになて虫な
かず油虫といふと虫にあててはにくまれず人にあてていさふはる

狗の齒は齧まる、蚤ははま、くはたて猿の手おさぐらる、風はのがる、事かたかるべ
端脚は瘦せたるも芥ももちる誇とぞその心いかつなぞ人の上よもこのふぐひいあるべ
し

蟹のあゆみに譬ふべきものこそなければ、原吉原を駕よのりて富士をながめゆく人にか似た
り

春の山ふみ

村田春海

春雨うぼふりてしめやかなるにひとり日長さまのうちよなにくれと古た世のさうしどもと
きでうち見るはど一ばしふづくるにとりそひてまどろむとせにたちまち柴の戸うちた
たて帥どの、待かね給ふをいかでまうで給はざるとくくといひさしては、り行くを見れ
ばとの、舍入なるが御どもものつらよりふりこへておどづれけるなりげに、ふり嵯峨の山ふみ
せさせ給ふなるよ歌とみの敷に、とてかねてめさせ給ふをおどかくとせれ、んど心もそらにて

やがてかりばかま水干とりきていろぎいでつさが野のかなたおな見めくらせば山かたつけ
 る老木の松れ陰にわけりたりたうりて暮ながう引さしたるなんとのかましなまけりま
 たふもとの芝生いと清なるにいまを盛とおほひわひたる花の本をいめさせ給へる中務の
 みこと今聞もある山風さと吹来てちりうふ花のけいひひさみがら雪をめぐらすとかいふばか
 りなるに春庭花をおもしろくまひいでたるうちふる袖にはひもたいならずやをらまきたれ
 おまへうちすきてかへりぬるはたとへなくめでたしと然といめられつどののはまちとり
 給ひてあろびとくせととのたまふ聲のいたよりさらは四人た々たちすがたひとさきが胡蝶れ
 ようひうるはしく霞れひまよりみだれいで、花のわらりとびちがひたるえもいはずつき
 しやがてそのわらひ一人をめして

いさへらばわをぶこてふよさうはれて花の本陰にけふりくさんどさこえ給へばどりあ
 へずこなたよりも御りへりきこえたまふ

ど胡蝶にもそれかたらめやさく花のわかぬ色香をしたふ心はあやかた〜さうひあひて
 春鶯轉春樂陵王納蘇利おどすき〜よまはせ給ふけふいかなたよもこあたふもの、上手
 もをえらばせ給へばすべていひまらぬ手をもつくして野山の本草もなびき空行を雲ともと

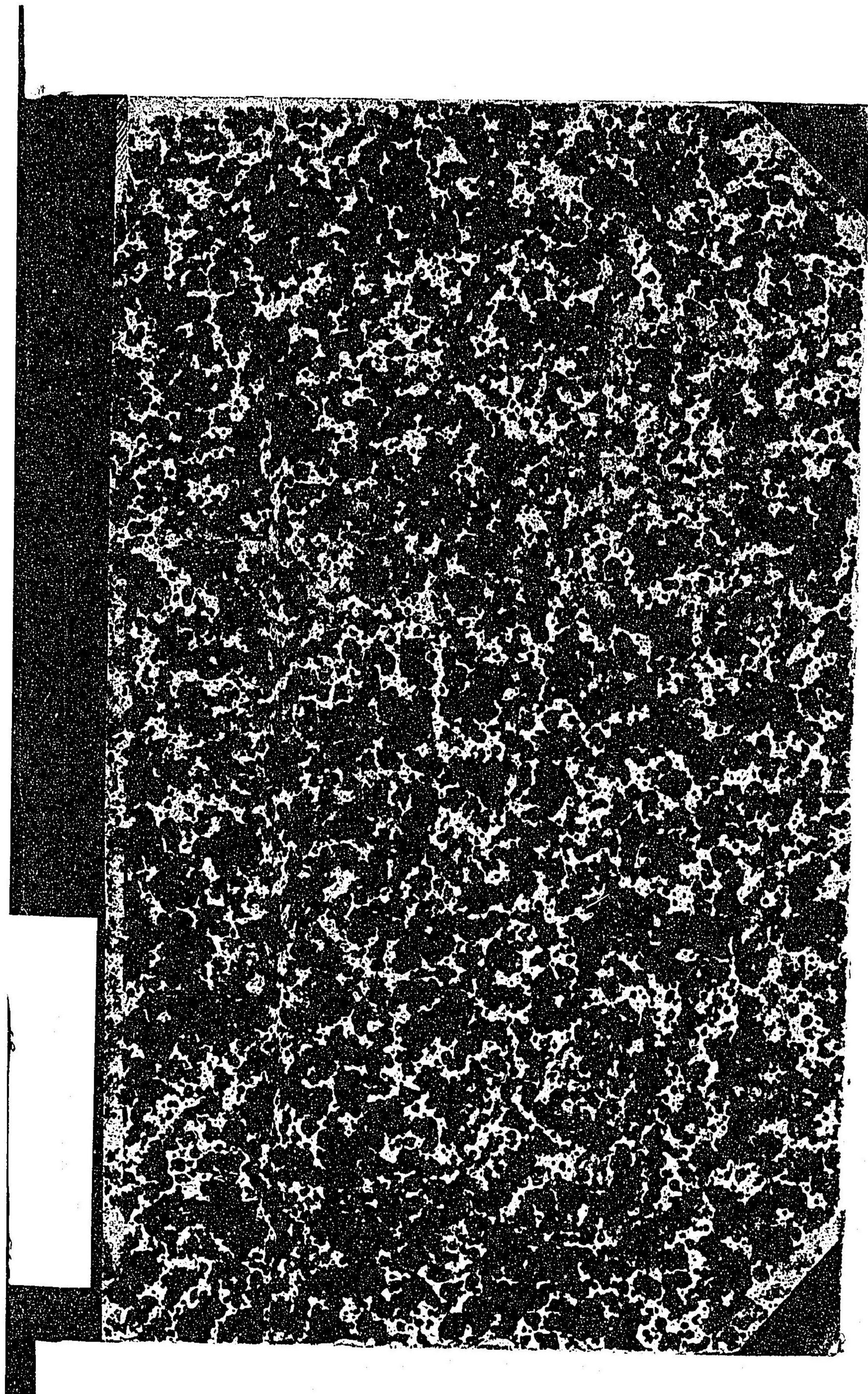
いめつべくあんわりけるさるいとうるはしくむつび聞え給ふまるが大かたのはかなたすさ
 みことにかたきにおどろじといごみかとし給ふもをかき御なりらひなりやうくてみこよ
 御酒たてまつらせ給ふ山吹の花ながふあるをつくゑおもひて上に、こがねの杯とのせ白かね
 の瓶子に櫻の枝をおもしろくとりようひて歌とくつかうまつらんものよとておのれに給へり
 いと心も得ねどもてまゐりたるにみこいと興せさせたまひてさかづきとらせ給ひぬたまへに
 はべりて瓶子とりながふ

わか櫻名におふ宮のいにしへの春おもほゆる花のさかづき山吹のほろすがよ三重の袴と
 りうへてたまりたるはいともたふけなくこそおほえ〜かみこそりの御つらひの圖書助とな
 んきこえけるいと大きやかなるすいらのふたよ色よきすみれをあまたうゑてくきなるの茶を
 つりりよしたるふんるりの壺に名だかきたきものともをいれて〜ろがねの火どり〜とろへて
 ろの上よおきたりふたわのさうかの地しきのはしに哥をうり〜れたる

もろともにもみれさくのふやとりせば草の枕もうれしからま〜野となつら〜みとおもひ
 とり給ふなるべしこの助の名高き博士ありけれ酒たうへて文つくらせ給ふ今日の山ふみれ
 こ〜ろを四韻の句におも〜ろくつ〜りいてたるを其道の人をうちか〜し〜いたくも

へるかきとていみじくめてあつりけりることもかづけ給はるひ乃足どりたさくく立
るほひ音がらまうりいづるまをりかうつみゆるされてをかかりき日影や山のはちうな
るまよ今いまかて音聲なるにやゆふんひだりも右ももろこゑに吹わけたるあまりに耳を
ろくぱうりたをえたるおふとめさめたればひねきすふりくくする雨の晴間なくて軒は玉水
みえうちうへたるきりけりさいゆめありとおもふを猶とそれかたくて

19
547



19

547

076914-000-5

19-547

国文源委 前編

武藤 元信 / 編

M30

DAC-0077

